# 動物園の歴史*

柳島 静江**

動物と人間との関係は、人類がこの地球に出現した時以来続いているといってよい。スペイン・フランス・イタリアなどで発見されている洞窟画がこの古い証拠である。洞窟画は古代人の単なる手すさびや芸術の為に描かれたものではなく、精巧でそれが教育的な意味を持っていたことを示している。人類と動物がいかに太い絆で結ばれていたか、容易に想像出来る。しかしこれらのことは、そのまま動物園の形成に直接に連なっていくことは考えられない。

エジプト・インド・中国では紀元前1000年頃、支配階級の興味から動物園ようの施設がつくられた記録がある。特に中国の周の武王は、その庭園にトラ・シカ・サイ・鳥や大蛇・カメ・魚などを飼育し、それを“智識の園”と名付けた。それは一般市民の動物学上の興味をひき起し、新しい知識を与えるという点で、現在の動物園と相通ずるものがある。その後、モンゴルのフビライ・カンによって引き継がれ、動物を見て楽しむだけでなく、狩猟をも含むように変わっていく。

一方、聖書によればヨーロッパではソロモン王（B.C.974～937）が、いろいろの種類の動物を飼育している。その後、古代ギリシヤでは動物園がかなり学問的に発展してゆく。そして、世界で初めてアリストテレス（B.C.384～322）が動物について書物を出版する。

ローマ時代では、動物飼育に対する目的が2つに分かれる。ひとつはローマサーカスと呼ばれるもので、猛獣や大型獣をエリーナの中で斗かわせ、その決斗を見て楽しむ。もうひとつは、動物を飼育しそれを観察研究することによって動物学の進歩をもたらそうとするものである。

しかしローマ帝国の滅亡後、ヨーロッパの動物園は長い衰退期に入り、わずかのものが王侯貴族や権力を持つ商人、教会、市などによって維持され、14～16世紀にかけて再び動物園は活気をとり戻す。この時代はすべての自然科学に対する人類の眼が開かれ、世界的な航海・探検ブームを招く。

そのようにして富をもたらしたルネッサンス時代は、探検者たちの持ち帰った珍獣奇獣が各所に設けられた動物園（メナジュエリ）に収容され、ひとつの新しい科学を形づくる基礎となる。しかし不思議なことに、その時代に設立された動物園で現存しているもの、またそれに直接つながりを持っているものは、殆んどない。ただひとつの例外は、オーストリアのシエンブルン動物園である。1752年に神聖ローマ皇帝フランシス一世が妻マリア・テレサの為に設けたもので、初めは私的な

---

* 第102回京都化学者クラブ例会「1998年12月5日」講演

** 京都大学名誉教授

ものであったが、1765年ジョセフ二世が一般市民の要望に応え市民に解放している。この歴史的な動物園は、現在でも当時の面影を残している。

19世紀に入ると、近代的内容を持った動物園が続々と出来る。一般市民のために一般市民によって設立される傾向が生まれてきた。

科学が一部の特権階級から市民のものになったことと一致する。従来の動物園が一部の特権階級の私有物的な立場から運営されているのに対し、イギリスのロンドン動物園は1828年、最初から科学の進歩をねがう市民の意志により計画され運営される。19世紀後半、動物園の開設はアジア・アフリカ・アメリカ・ラテンアメリカ・オーストラリアにまで広がっている。

1882年、わが国最初の上野動物園が誕生した。欧米諸国では自然科学のひとつのよりどころとして博物館（動物園・水族館・植物園等を含む）を考えているが、この概念をわが国にもたらしたのは、江戸時代末期に幕府の使節団として海外に派遣された人々である。しかしこの概念をより正確にしかも一般化したのは福沢諭吉であってその著書の“西洋事情”の功績によるところが大きい。日本における動物園開設の直接の端緒となったのは、1873年オーストリアのウイーン万国博覧会にわが国が参加し、その際の出品物と、従来、湯島大成殿に設けられていた博物館の材料とを合わせて、富国強兵策の一つとして展示したものである。ここからわが国における近代動物園へとつながってゆき、一般市民の多大な好評をうる。当時博物館は農商務省博物局に属し、動物園はその付属施設であった。しかしわずか4年後の1886年3月には宮内省の所管へと編成替えが行なわれ、1924年皇太子殿下の御成婚を機に、東京市に下賜される。

その後1903年4月に京都に初めての公立動物園が出来る。1900年5月東宮（大正天皇）が御成婚の大典をあげられた時、京都市民が協力一致、一万四千円を京都市に寄付、当時の市長は協議の結果、女子手芸学校創設と動物園設立の二案を得る。しかしこの機を逃しては市費多端の折柄、動物園創設は容易な事ではないので、もっとも適切な事業として市会の協賛をとりつける。さらに一万六千余円を支出して開園する。ついで1915年1月に市立の動物園が大阪に生まれる。上野動物園同様に大阪府立博物館と併設されていたが、大阪天王寺動物園として大阪市に移管される。

明治・大正を通じて日本に建設された動物園は、前記の三園であるが、戦時色華やかな昭和20年までに熊本・名古屋・井の頭などに動物園は誕生し、戦後になると信じ難い程のスピードで日本全国に動物園が建設されることになる。明治時代にわずか二園であった動物園が現在はアメリカに迫まり、その数は世界第2位になっている。これを自然科学の発展の過程とみるか、娯楽文化の中の一つの通過点とみるかは、それぞれの動物園自身が答を出すことであろう。

環境破壊による種の絶滅傾向の中にあって、動物園の役割は野生動物の飼

育・繁殖にとどまらず、希少動物の野生復帰を含めた保護活動にも貢献すべきである。歴史的には動物を興味の対象として出発した見世物、メナジュエリの時代、ルネッサンス以降の科学研究の時代、現代のヒトと動物の調和をめざす総合科学の時代へと移行している。

## 参考文献


小泉 丹（'30）動物園 岩波書店

黒川 義太郎（'34）動物談叢 改造社

黒川 義太郎（'34）動物と暮らして40年 改造社

高橋 峯吉（'57）動物達と50年 日本の実業社

福田 三郎（'68）実録上野動物園 毎日新聞社

佐々木 時雄（'75）動物園の歴史 西田書店

佐々木 時雄（'77）続動物園の歴史 西田書店

古賀 忠道（'78）私の動物誌 東京書籍

Vevers・羽田 節子訳（'79）ロンドン動物園150年史 築地書院

アニマ特集動物園（'79）No.73 4月 平凡社

世界の動物園（'79）文芸春秋

東京都（'82）上野動物園百年史 本編・資料編

小島 一介（'83）京の動物園誌 たたら書房

京都市動物園（'84）京都市動物園80年の歩み

大阪市天王寺動物園（'85）大阪市天王寺動物園70年